貰ひ、漸く上陸する事が出來ました。體は雨でビショ濡れです。こんな事とは全く豫期してゐなかつたので、すつかり面喰つて了ひました。

上陸して間もなく、露店で雨宿りをしてゐた五六人の男がこつちへ向いてやつて來る。綱と棍棒を持つてゐるので縛られるのかしらと思ふと、荷物を運ぶ人夫でした。英語は到る處通じると聞いてゐたので、英語で話し掛けて見ました。English? Nobody speaks English?『英語？英語を話す人は居りませんか？』

然し誰一人返事する者が無いのです。『税關は？』と訊ねるとPay money「金を」と云つて手を差し出す。外國では珍らしい事でも無いので、先拂は何うかと危ぶみましたが、大勢の事だし、兎も角半弗丈渡してやつた。すると二人の人夫が、荷物を中にして棍棒で擔ぎ、肩で調子を取り乍ら運び出した。もの〻半町も歩いた時分、丁度家の中から出て來

る西洋人に出會つた。之は好都合と思つて、

『一寸御訊きし度いのですが……』と尋ねると『何處へいらつしやるのですか』と佛蘭西語で問ひ返した。『税關（アラ・ドウアンス）へ行き度いのですが……』。と答へると、『それではもう少しお出でなさい』と敎へて呉れた。それから約半町位歩いて、漸くの事で税關へ着いたのです。着くと直ぐに、手紙を差出しました處、何事か協議してゐる模樣。荷物は檢査しさうな氣配も見えない。室の中では數名の役人達が、何か書き物をしたり、スタンプを捺したりして居る。一人として英語の解る人も居ない、幾ら手振りで話し掛けても、丸つきり通じないのです。

さうする内に廳て一人の男が出て來て、ブロークンな英語で話し掛け、そして私の手紙を讀んで、給仕へ命じて税關の本部へ案内してくれました。

其處で一時間も待たされた後、漸く相手になつて貰ふ。再び例の手紙を差出すと、丁嚀に會釋して奥へ消えて行つた。部屋の中は、煙が濛々としてゐる。中を覗くと、十二三名の男が、煙管で頻りに煙を吹いてゐる。軈て、一人の役人が出て來た。『鞄の中には有税品がありますか』と訊ねる。私が『何もありません』と答へると、『宜しい、ではお通り下さい』といふ許可の言葉で漸く解放された譯です。

斯くて、物珍しい人力車に乘り、獨逸領事館へ行きました。そして領事の世話で、フランス式の一ホテルで漸く手足を伸ばす事が出來たのです。

幸ひにも、領事館で、東京在住のドクトル、ウエルニツヒ君に會ひ、彼の世話で案内人を得、無事江戸に着く事が出來た譯です。東京は日本の首府ですが、最近までは、江戸と稱してゐた所です。今では東京と云ふ人もあり、未だ江戸と呼ぶ人もあります。

東京へ着いて、直ちに醫學校外科教師のシュルツヱ博士を訪問しました。非常に親切なもてなしを受け、家庭に歸つた樣な氣持がしました。

其の夕方、彼と二人で、上野公園の西洋式旅館『黒鯨亭』へ行き、其處で多數の同窓に會ふ事が出來ました。こゝで私の日本觀を述べると『君は日本に上ぼせてゐやしないか。少し醉ひを醒まさなくちやいけないね。』と申すので、私は『僕は日本の實際の姿を見に來たのだ。醉つてなんかゐないよ。どうせ、自分の國に居る樣な具合には行かないさ。先づ悲觀しないでやる積りだ。』と答へた次第です。

皆樣　日本に於ける私の第一印象は、決して上乘とは申せません。然し、何卒御安心下さい。輕擧盲動はしませんから。何れ又御便り致しませう。

一八七六年（明治九年一月二十六日）　東京加賀屋敷にて

拜啓　本日加賀屋敷内へ引越して參りました。以前大名の加賀様の屋敷があつたので、こんな名稱が付いてゐる譯です。嘗てドクトル　ヒルゲンドルフ君の住んでゐた處で、以前一度遊びに來たことがあります。昔は、藩主の大名は、江戸にも同様に屋敷を有して、其の數は數百に上つてゐました。

私の家は、坂の上にあつて、下には不忍の池を瞰下してゐます。池には、蓮が繁茂し、中央に美麗な朱色の御宮が見えます。又向ふの丘には、上野公園を望み、眺望絶佳です。上野は八年前、維新の決戰が闘はされた所です。

庭には數知れぬ古木が繁り、非常に美しい。意の儘に手入れする事は、考へる丈でも愉快なものです。

最初の惡印象も消え、友人から受けた悲觀的知識も、霧散しました。

日本到着後五日で、生理學の講義を始めました。學生は皆良い頭をしてゐます。講義は獨逸語で行ひましたが、殆んど全部了解してくれたので、通譯は助手の役を勤めたに過ぎません。

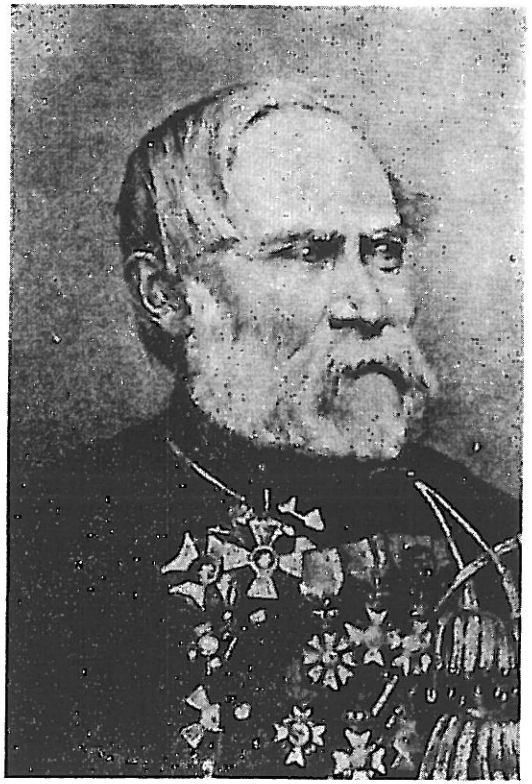
醫學校は余り感じの良い建物ではなく、天井の低い迚も不格好な木造建築です。そして左右に開く戸が付いて居ります。奥は宛で迷路の様に塞がつてゐます。

日本の醫學が、獨逸人の手に依り、而も獨逸語で輸入されたと聞いて、皆様は驚嘆の聲を擧げられる事と思ひます。之も日本が獨逸醫學を信頼したがために外ありません。例へば、五年前には、軍醫正ミュラー（外科醫）及び助手ホフマン（内科醫）を招聘して、日本醫學の西洋醫學への轉換を依囑してゐます。此の點に於いては、ホフマン君は正に第一人者と申すべきで、其の功績は永く沒する事の出來ないものです。

然し、その以前に、日本に於ける獨逸醫學の萠芽は見えてゐます。既に十七世紀の昔に、獨逸醫師、ケンプファーの渡來を見て居ります。勿論、オランダの醫官としてです。彼は種々なる困難を克服して、日本醫學へ大なる貢献を盡したのです。

更に今から五年以前にも、ヴュルツブルクの醫師シーボルトが和蘭人と稱して來朝して居ります。斯樣に國籍を詐稱したのは、入國困難の事情を顧慮したからに外なりません。シーボルトの許には旺盛な知識慾に燃ゆる若い熱血の學徒が、生命を賭して集つて來ました。

斯樣にして、日本醫學は獨逸人に依り築かれ、從つて當然、獨逸語の使用を見た譯です。同僚の獨逸人中、ドクトル・シュルツエ君とは最も懇意にしてゐます。其他マイエツト君は經濟學に造詣深く、ネツトー及びナウマンの兩君は非常な精力家で又勉强家であります。我々のグループの世話役は、バイアー氏です。彼は親切そのものゝ如き紳士ですが、



シーボルト先生

唯猶太人であるばかりに、敬意を拂ふ者が少いのは遺憾です。獨逸の代理公使は、フオンアイゼンデツハー氏です。

何れ又興味ある事等御通知致しませう。

論文

明治時代（一）

一六〇〇年（慶長五年）に至り、德川家康は、織田信長、豐臣秀吉の偉業を繼承して、全國統一の覇業を完成した。彼は、自ら將軍と號し、居を江戸にトし、子孫は代々將軍となるべきを定めたのである。此の間無論、京都にあらせられる一天萬乘の大君に對しては、最高の敬意を表するを忘れなかつた。斯くて封建制度を確立せる家康は益々善政を布

き、民心を安んぜしめたので、以後二百五十年の長きに亘つて世は太平を謳歌するの礎を築いたのである。

斯くの如く、永く平和の惰眠を貪り、戰亂から遠ざかつた爲に、武士は次第に武藝の練磨を怠つた。之に反して、學問の研究が旺んになり、遂には、日本建國の由來に迄研究の歩は進められて行つたのである。

十八世紀の中葉よりは、數名の大學者の指導の下に國粹學が狂信的に廣く行はれ、總ての外來物は之を排斥して、唯日本固有のものゝみを尊重した。同時に日本古來の信仰たる神道、即ち天皇は神の裔にあらせられ日本國を統治し給ふものであるといふ意識に目醒め、將軍は王位の簒奪者である事を覺つて來たのである。爾來、天皇を統治の主權者たらしむべしとする反將軍の聲は次第に高まつて來つた。

猶全國の諸大名、殊に江戸より遠隔の地にある者は、將軍の麾下にあつて、其の命に服するを潔しとしなかつた。一九世紀（明治廿三年）の中頃ペルリの來朝以後は、國内は遽かに混亂を來し、鼎の沸くが如く、反將軍、反德川の熱は、全國に強まつて行つたのである。即ち南の雄藩、薩長の指揮下に、國情は次第に騷然を加へ、將軍に對する革命的色彩は愈々濃厚になつて行つた。爰に留意すべきは、斯くる運動の事實上の指揮者は、藩主たる大名に非ずして、藩主即ち武士であつた事である。之等の勤王の熱意に燃ゆる愛國の志士は、幕府の壓迫をも顧みず、京都にある岩倉、三條の公卿と往來して、頻りに畫策に耽つた。

斯くして、彼等薩長士の大名は、將軍に大政奉還を迫り、國權の復興を計つたのである。又一方全國に散在せる二七七の大名小名は悉く自らの特權を放棄し、版籍を奉還した。從

つて藩士即ち武士も、自己の特權を消失した譯である。斯くして遂に封建制度は廢止されたのである。

扨て、爰に制定された國家の官制は、概ね、七〇一年（大寶元年）に制定された大寶律令に範を則つたものである。即ち所謂太政官制度であつて、宰相としての太政官には、三條公、左大臣に島津公（薩摩藩主）、右大臣には岩倉公が夫々任命された。之等の高官の下には、八名の參議を置いたが、大名は一名も之に參與せず、武士特に薩長の武士を主體として固められたのであつた。中でも薩摩の西鄕將軍、大久保利道及び木戸孝允の諸參議が、維新の原動力を成したのである。其他伊藤、井上、山縣、黑田、大山の諸氏も之に參加した。（後の所謂元老の基礎をなすものである）。之等の參議に反對の位置に起つてゐた者に、大隈（一時的）及び板垣があつた。後年參議江藤新平、西鄕隆盛は、叛徒の汚名

三條實美

岩倉具視

西鄉隆盛

木戸孝允

大久保利通

井上　馨

伊藤博文

山縣有朋

大隈重信

大山　巖